

# 「アクティブ・ラーニング」とは

アクティブ・ラーニングは、  
「21世紀を生き抜く力」を身につける、  
主体的で協働的な学習（指導法・学習法）です。

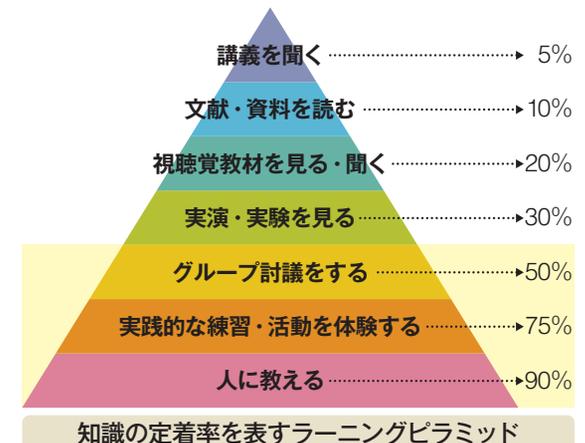
「active learning」の概念は、アメリカの高等教育改革の流れのなかで形成されてきました（例：Bonwell, C.C., & Eison, J.A. (1991) *Active learning: Creating excitement in the classroom*. \*p.4参考文献1・2）。大学の大量化（大学進学率上昇）により成立しにくくなっていった「教員が話すのを聞き、黒板に書くものをひたすらノートに写すという受動的（passive）な知識伝達講義型授業」からの転換を志向するものでした。

「脱・講義型授業」「学習者中心の能動的（active）な教授・学習法」としてのアクティブ・ラーニングの有用性は「ラーニングピラミッド」（右図）に示されています。

「学んだ内容を半年後にどれだけ覚えているか」を教授法別に調査したもので、「講義」では5%にすぎない定着率が、「討議」や「人に教える」などの協働的な活動を取り入れた場合には50~90%に上がります。実際に、講義では集中が保てない学生や無関心な態度

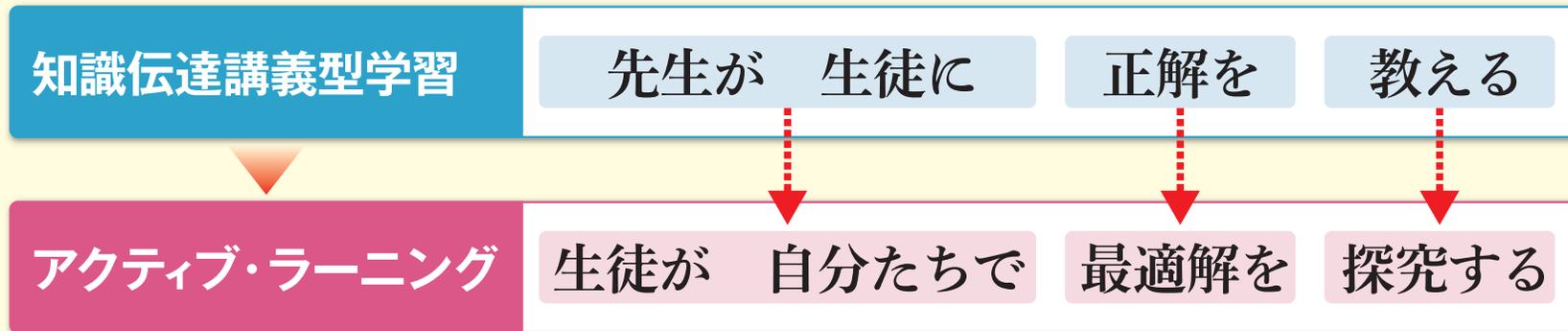
を示す学生たちが積極的に授業に参加する（ように見える）ことから、近年は日本の大学においてもアクティブ・ラーニングの導入が進んでいます。

これらは小・中学校においては、学習者の発達段階からして「当たり前」とも思える現象ですが、今、アクティブ・ラーニングを考えるうえで留意すべきは、それがあえて初等中等教育の教育課程改訂という文脈で取り上げられている点です。（\*p.4参考資料1）



※アメリカの教育学者デールの「経験の円錐」をもとに作られた模式図。数値の根拠となる研究結果は公表されていない。（\*p.4参考文献1・3）

## 21世紀型能力育成における、学習スタイル・授業観の転換イメージ



※二つのタイプの間には、両者を組み合わせた中間的な学習・授業形態が存在する。  
学習の目的・段階・対象等に合わせて、授業・学習を設計することが求められる。

上の図式は、「先生／生徒」を「部長（社長）／部下（社員）」「監督／選手」「国／地方」などに置き換えて、現代社会の課題に適用して考えることができます。公共施設の建設計画を例にとっても、「国・行政が決定事項を地域住民に通知伝達する」という旧来の住民不在・受け身型から、「住民・行政・専門家などが協働で課題を発見、共有、検討し、判断する」という地域主体、住民参加型プロセスがとられる時代になりました。そこには前例や正解があるとは限りません。当事者一人一人に求められるのが、「21世紀型能力」です。

- 対話・話し合いの知識やコミュニケーションスキル（拡散型の話し合い（ブレインストーミングやワールド・カフェなど）、合意形成を伴う収束型の会議、アイデアや意見を収集・交流・検討するためのプレゼンテーションやディベートなど）
- 人間関係形成力・社会参画力（立場・利害・価値観が対立する相手とも、自己の感情や行動をコントロールし、当事者意識をもって主体的、協働的に課題に取り組む資質や能力）
- 論理的・批判的思考力
- 問題解決・発見・創造力
- メディア・情報リテラシー

21世紀型能力を育成する「アクティブ・ラーニング」は、身体のみならず、思考をアクティブに働かせ、その認知や思考プロセスの外化（可視化）によって、協働的な相互作用が活性化する学びです。

「なにを」「どのように」「なんのために」学ぶのか——人生や社会という大きな学びの文脈の中に児童生徒の学習を位置づけ、「仲間とともに成長すること」「自己と社会のために学び続けること」の意義や価値を共有することが、今求められているアクティブ・ラーニングの本質を支えます。

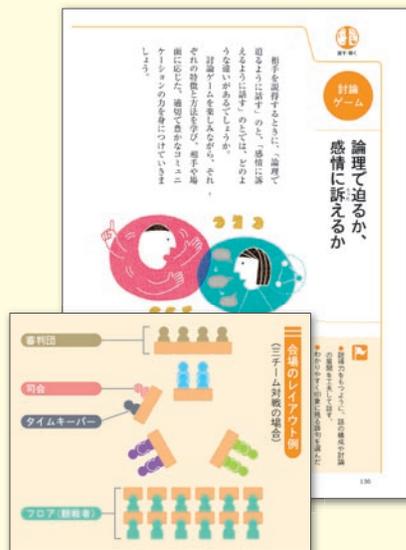
\*「21世紀型能力」については、「教育最前線」前号（2015.2.20発行）をご参照ください。

# アクティブ・ラーニングを創出し、支える教材例 \*三省堂平成28年度版中学校国語教科書「現代の国語」より一部を抽出



↓ **質問**・1年p.68

協働的問題解決における対話や話し合いの基盤となる質問や場づくりの大切さについて学習します。



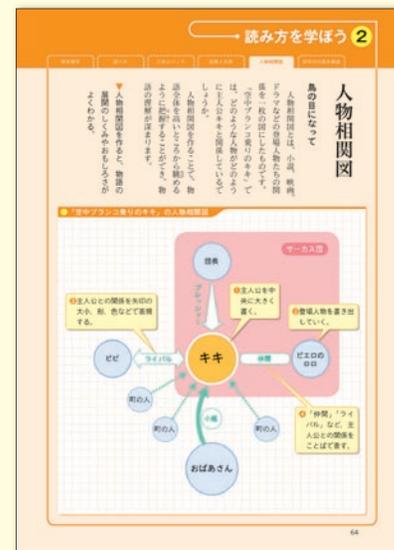
↓ **討論ゲーム**・1年p.136

ディベートゲームを楽しみながら、論理的思考力、コミュニケーションスキルを身につけます。



↓ **ワールド・カフェ**・3年p.181

問いをもとにした〈思考・外化・交流〉のプロセスによって協働的に知恵を生み出す対話の場を体験します。



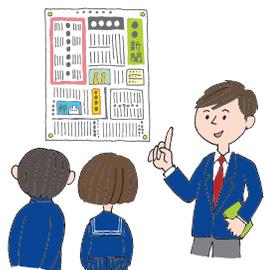
↓ **読み方を学ぼう・人物相関図**・1年p.64

思考プロセスを可視化することで活発な交流が生まれ、理解が深化します。習得した読み方(方略)は実践知(技)として活用されます。

\*「象徴」「例示」「対比」など全17方略を設定。

- 場づくり(スピーチなど)
- グループワーク(行事案内リーフレット、グループ新聞、創作文、プレゼンテーションなど)
- 対話・相談の協働プロセス(意見文、主張文、批評文、パネルディスカッションなど)
- 合意形成(企画会議など)

この他、「即興劇」「対話劇」「句会」「ブックトーク」「ビブリオバトル」など



\*平成28年度版「現代の国語」では、すべての領域においてアクティブ・ラーニングを効果的に組み込んでいます。

## 1 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」

（平成26年11月20日中央教育審議会）より抜粋

※傍線編集部

（前略）新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連して、これまで、例えば、OECDが提唱するキー・コンピテンシーの育成に関する取組や、論理的思考力や表現力、探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育（ESD）などの取組が実施されています。（中略）。これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。……そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。（後略）

## 2 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

（平成24年8月28日中央教育審議会）より抜粋

※傍線編集部

（前略）生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。（後略）

### 【アクティブ・ラーニング】

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

——同答申「用語集」より

### ●参考文献

- 1) 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。
- 2) 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター(編著)(2015)『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房。
- 3) 小林昭文(2015)『アクティブラーニング入門—アクティブラーニングが授業と生徒を変える』産業能率大学出版部。
- 4) 上田信行・中原淳(編著)(2013)『プレイフル・ラーニング—ワークショップの源流と学びの未来』三省堂。
- 5) 清宮普美代・北川達夫(2009)『対話流—未来を生み出すコミュニケーション』三省堂。

